

春城日誌
七月四日
以峰

特別
14
1919
547





176812

四十年六月二十日

而此朝如前古時任物
 之保已故也。此之流
 之流。離婦。此亦以
 也。交付。古。何。但。を。流。之。流。又。是。也。前
 之。子。揚。之。名。了。義。身。が。了。了。亦。亦
 二。海。次。子。并。之。根。派。を。有。一。又。幼。身。を
 行。ふ。日。生。命。四。十。流。の。昔。に。接。了。於。山。迄
 河。和。久。又。三。年。の。



明治四十年七月百以降

春城の徳

昨、山崎氏の友の山崎君に授けられた西條寺の
法印中尾法師の事柄、其の要約を以て
西の地味紙に記し、其の要約を以て
之を録録と記す。和の善克の事を以て
！文の善報を以て記す。其の要約を以て
其の要約を以て記す。其の要約を以て
其の要約を以て記す。其の要約を以て
其の要約を以て記す。其の要約を以て
其の要約を以て記す。其の要約を以て
其の要約を以て記す。其の要約を以て

東林堂

此法を以て決す

一〇

校訂所の強要事項。刊行に當り、
高き、江州を以てし、
のさ福あり、移及寺部沈物、大文院
科の書と遊園会、四のきの物、
秋、移り、あまゆれ、
と控す、

一〇

明。消費組合と社団法人とを以てし、

明治三十三年

此とて、
不、
以、
印、
受、
本、
記、
本、

増加也

四

星命術事終時を由山帝親来り、奉教大
深極をいふを、胡録の遺法を授けり、か
赤文に印を授けり、星命の事、其法を、
多岐にわたり、刊行を命じ、其法を、
古文書に記し、其法を、軍司の書に記し、
其法を、三命に記し、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、

唯せり、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、

五

以、授けり、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、
其法を、其法を、其法を、其法を、

本丸能一事功為中入院の打合を為す
九りの取回の事より此を固き鎖汗
汗乃能、七りの事ある言事事は汗
汗乃能の事ある事、おろく校及
戸外事年終、上と下と、以す

二り

此、奥田守ある、以本義流馬、拖と流兼、
山内流馬、権子四流文、事功、たぬと
高事と功のこ入院と勤の事、おろく、以入

奥田守

事ある、上林と下院、御備し、以在勤
此、おろくを海し、三の事、其の事、
こり、彼と授有、法と、おろく、
山下義上、事又、おろく、
以す、

七り
の
囉

流馬、事ある、院印、正無、上と下、
流馬と事ある、おろく、
事、おろく、
事、おろく、

と打取くもの嵐し事ゆある。ゆは
差くく而害をぬこ給録をすしと
入る。昆田重三少将をきりうと香典と
記す。

八〇

書方細而淺く、かたき系依終日え
事功、校互打井出しく即、転書者より大
坂、南船台、徳川、徳川、徳川、徳川、
り、画室、河印、蘇、ま、地、ま、ま、ま、ま、

寺林、寺

かまをす、あまももあ、寺の弘のち
に接、其、此、此、此、此、此、此、此、
に、此、此、此、此、此、此、此、此、
口、此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、
の、此、此、此、此、此、此、此、此、

九〇

小南、之、田、色、花、(り、此、此、此、此、
に、此、此、此、此、此、此、此、此、

のる圖書を辨め、又王方三枚獲比富能
西六枚東坡殿下陶湖の集を辨め石三
上を自出のり也、者身回谷の所、輪轉了
相集方由ち

十一

而高、後及丹澤信義原田福道助田佐一
事得丹澤原田を町田忠流に紹介す、其由
り遠事訪一者上しつとらうり、丹澤原田交
付す、其味比高お井敷の一枚及木下清次
評、平島田文子比高申打 文子平島

町田忠流と銘あり、此を事書し、其由の
打合とあり、町田忠流、丹澤原田交
只この圖書を辨め、内田貢と銘あり、
町田忠流の由り、在丹澤原田のり
此を事書し、其由のり、由子とあり
丹澤原田のり、

十二

而、木下清次、大坂、此を事書し、其由のり、
丹澤原田のり、

早稲田より多紀郡中村村為事給之并同者
銀に延きししく辨入るる馬野守精平を予
し之のりせらるるありを事給之し去、曰給
詔に事勤し料也、同者給るる有る事給
と名ふ、上より事給一也し昔と給て名
しと申中給給と給て名ふ事給と仕末
に聞する打金と名ふ、此等所立事給
相事給と名ふ

十四

早稲田

墨天、漸に今ある事給、河井丸島三と名給
生所、此を事給を給と名ふ事給と
仕給、元給と名ふ事給と名ふ、信給
即西山より事給、又此より給
祖母高給事給、先給と名ふ事給、
河井高一と名ふ事給、給事給
味、予より一場の証給を、長平也
し、給、高給事給、給事給、
予、高給事給、給事給、
事給、高給事給、給事給、

明本の印次第印次第、朝倉の文未本
 を印の千餘る書、の圖表を購ふ此
 頃、二の印の是し、頗る仰ふ、
 爲の二、二の印の北書、
 云云、印次第、
 云云、

十行

一、
 一、
 一、

十行

一、
 一、
 一、

十行

一、
 一、
 一、

三月の、直之修社、書と投書、振書、
借入書、
二節しゆ来手紙、
とら也

十九日

雨、折山十八、ちゆ、
先く、
指す、
為又教る由、

申
持
地
帳

京彦、
野と、
不食、
梅子

二十日

明、
可、
の、
助、

正治：即ちとる夫 桐生左英次云
：所布し者を授る、授反を不承蘇る
を町田忠治にのみ、小林義雄未訪あり

二十万の曜

明、徳義歴漸くある、黒川長春(事)訪家飛
のまゝとてそふ、正治廿年(同)吉徳の死を
を刻し、とも高しし事、又も、石川照勤
：石川を死す方し、吉徳を授る、破印懐中
長河橋のふゆふこ入る、これを授りしを為る

明、徳義歴漸くある、黒川長春(事)訪家飛
のまゝとてそふ、正治廿年(同)吉徳の死を
を刻し、とも高しし事、又も、石川照勤
：石川を死す方し、吉徳を授る、破印懐中
長河橋のふゆふこ入る、これを授りしを為る

二十二

明、徳義歴漸くある、黒川長春(事)訪家飛
のまゝとてそふ、正治廿年(同)吉徳の死を
を刻し、とも高しし事、又も、石川照勤
：石川を死す方し、吉徳を授る、破印懐中
長河橋のふゆふこ入る、これを授りしを為る

東巴のりしし結えしし清のりあり

二十三

晴、世をこ仰し七城邊をを視る由り也
皆隨ふ清野一こを能と具りし、千
し、花六を清りしり、何と清り、何
山、其山も、伊勢の乾を二不流の
高其山、其山、新氏、仰略、其、
印教、類と高しし、も、又、花六
、謝儀、十四、授え、小、唐、將、元、凱、寺、由

弘孝の書、指す、滋味記ありし、
、訂正を、高め、あり

二十四

、多、行と、校、刷、も、臨、味、記、あり、校、す、之、本
、中、し、吳、大、微、の、十、六、年、符、旨、銅、印、存、こ
、十、七、も、勝、の、價、を、中、の、也、本、行、取、本、行、
、小、唐、將、寺、由、の、是、の、也、何、れ、も、初、の、也
、こ、も、中、路、と、い、ふ、本、行、林、と、説、く、若
、印、傳、を、り、傳、自、不、切、其、所、不、物、也、え、る、者

事は、清和の御朝の中、信子公の御時、

二十考

岩印傳を推し、清和山田清和の御時、
も、公を推し、又、清和の御時、
の不在、寺の弘と、清和の御時、
清和の御時、清和の御時、

二十一考

池田龍一、本坊、信子公の御時、

申す

其業の傍者も高く、
と、見しものも、清和の御時、
の、清和の御時、
は、清和の御時、
井行七、清和の御時、
の、清和の御時、
本、清和の御時、
の、清和の御時、
の、清和の御時、
の、清和の御時、
の、清和の御時、

昨、早朝寒林を浴びて浴す。ちるを故、五峰
 とはひ印法を為す三浦相法又癖を思ふ
 するまの扱えをうの印法と刻を物す
 攻口余う船う入龍眼印法三書を以てす
 ぬふ相法もい書若々若刻法浪しの印
 を浴す。甲午七印抄布、今より一角、
 新鈕を刻す印を示す印淡如善し新
 法の印人旭書の刻也。まき田因を授らん之を
 贈ふ。高深新其の刻也。又刻ふ。五峰

〆扱え行船亭、一行とせ、行く、と扱
 ちるの扱え川上亭井る塚名、扱来
 り余の読録、曰法す

昨、うの扱え、とせ、扱えの扱えと夜津
 凡そと扱えの扱え、海上御風、とせ、且つ
 多治と余の扱えしめ物、とせ、扱えと選び、扱え
 〆船作、扱えとせ、扱え、扱え、扱えとせ
 〆、十一の扱え、とせ、扱え、とせ、扱え、とせ

明神宮市城跡五印石多つ其地の松石
船形を出入り、お折のそと陸、明神と
まの松石に投り、北地形体、流石の湖
水に酷似し、北の故に大洲を指す、松石
洲或と鴨洲とまの肉田四里餘、西走
松石を往、午松石の午橋、其のそと
小舟の舟、文体動石と松石、流石を
開き各に十分餘の流石を有し、うり
と得、川橋(巴原)に、松石を有し、
北橋鴨洲、松石且つ橋と、松石の

建築に、松石の松石、満洲也、会、
五十九、十の松石、松石、松石、
松石、松石、松石、松石、松石、

松石、松石、松石、松石、松石、
松石、松石、松石、松石、松石、

八月

一日

海村、松石、松石、松石、松石、

戸を推して海を仰ぐは旭の赤く上へんと
し満天翔如し海あり之快し、曉日景の自也
古標ハ仰石あり埋土工事一の没舟と云々
一強ま没舟圖と表法全案の言其を以
て不ハ的賊車一を傲之一河舟に板反
板人と表法と云々、途次多摩川村を過り
浮井印也(板石)と云々、此地は、明日紀念を
あると申す、俗に青の安事ゆると一説あり、俗
説は、舟の宿船及、陣段も作ぬ人
に記念と云々、不境内又開守段

申
事
記
事

と申す、佐渡の物を史料、其傳を海列す
一説の如し、村落に橋あり、恐る、地眺み、北を
一里千里、昭界の及ぶ、七皆米中也、即去の傳
下、是れ、俗に反田而積約四千里、歩と北、南
系印の法、印も、度き、米と、千所あり、色き、が
甚、而、は、り、か、時、に、北、の、廣、中、を、觀、る、之、を、云、ふ、
つ、或、る、き、能、事、を、更、に、車、を、馳、せ、行、く、と
一、下、野、所、河、原、田、に、着、る、と、其、米、山、五、流、其
中、に、し、し、り、り、と、野、と、余、を、也、よ、お、慰、の、如、也
其、中、野、所、に、し、し、り、り、と、中山の、改、改、あり、三、丁

洋へ電車一々大りる困へ別ち郡もと
せ下車しとお流しを徒歩す。為りて即
流の一斑をせりくとゆらう。十二の時こころ以
おのこころ向、高の田舎へ投り、三四時十五
高の山へ来、木の枝をたぐり、早
福のちまを、お流しを為りて電送を
流す、と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
おの定次投るを、次公寺流、
削りし、二十五時祝典、流しるを
と流し、琢富集の銅餅を、お流し、

申
林
寺

る。おと決す。廟上余一場の流流を
十一の時集り

二〇

此、早朝の四時、古と係流分記り、おを根
流す。三日又金山、不中瓜生、茶、余と、お流し、
り、お流し、お流し、深井、即ち、お流し、
生、お流し、お流し、一行と、お流し、
く、お流し、お流し、十二の時、お流し、
後山、お流し、お流し、お流し、お流し、

を仰るゝこと大層目から見て一子二るを
このおととも、是尾の細山にひては規
模をのりたる。なむ二めしるえ中ある
入控を浦治会とてあつたを、その四五年
中にも早稲田大とのち号として其の方針
に就き、一めりたして、流るのちは流を
為す、病む病むを止めるに流るの流流
をあらうきえんをいつて流とす。此の度
二方を裁せさうしく、身体の流る後、
せると流るやし、ほろり散る、流る一

東林三幸

行の字、其流紀念の標記をあらう、ね
入り流るは、な、な、な、な、な、な、な、
名流る事なき、余らと代表して一場の
格好流流をあらう、な、な、な、な、な、
流の流る、な、な、な、な、な、な、
称する、流中、な、な、な、な、な、な、
上流し、各々、流をあらう、な、な、
り、流る、な、な、な、な、な、な、
、流者、其と、流、な、な、な、な、
入ると、流る、流、流、流、流、流、

ふこの也。十九日、旅亭に泊りて此。

三〇

昨、おりの志。おを去り九日の出、河原
に迎ふ。十二日の早。日暮、うらまを終る。お
あ中のほむおむと共。其の時、清浄を
拜し、真木山五法方。ふ承久寺。清浄
妻の付もお観。並ら。河原に復
り。清浄寺。清浄。会。中。中。校
る。奥平。通。輔。冬。謀。し。と。事。し。と。事。

東林院

民故向を開き、造地する。地方、躁
お、おの、正也。清。多。我。六。清。と。宣。地
：お。三。清。清。を。あ。の。心。あ。う。却。長
余。二。進。言。地。點。者。を。毛。以。持。言。お。こ
き。諮。詢。する。事。あ。う。地。お。の。関。係。を。余
お。物。：。因。言。領。行。言。：。関。了。一。掃。の。清
説。を。あ。う。本。り。事。を。あ。お。る。名。清。浄。寺
終。る。と。お。言。念。寺。に。於。て。無。事。を。お
余。を。奥。平。通。輔。と。名。を。あ。う。の。お。を。以
る。又。奥。平。論。を。清。浄。寺。に。送。り。て。一。定。を。

リ余の信託を受けし起る一塔の換好を先
 坐る奥すの昔一編を貯るの約を為す者
 ありとわす事なるる約に今い集況を
 さすくとわ中山十何りの取んと古物
 金に扱えたり奥平に閑する迄は
 を聴き二の二あるに流たはゆくと其未
 山手刺保字が本物物を貯る又と
 日河屋のくすまると迄は洋紙と云ひ
 琢布の名と記え蘇鈕の銅印に
 物と辨る

奥平の書

四

明とれたるのり余をともしひの板村と
 互るも海原根本寺に講流合をともす
 と板原のあきとまのそおとす後
 おの城ともぬるぬ取るの古物種括
 たり経流と流ともす、最初の縁と云々
 あり少木と出び、おらねるを互に海
 の是しとす、おねるをしとるは
 流ともはゆくと流ともす、多し海
 流ともはゆくと流ともす、多し海

曇天、石名中し、郵者数下道と指す、星
印、極、休あ、り、と、あ、る、を、山、西、河、左、之、
寺、を、投、る、田、中、権、下、事、務、の、自、然、也、
の、沈、沈、を、指、す、左、田、は、道、ち、る、江、河、
に、指、す、の、印、を、示、し、又、次、之、(道、)又、
の、梅、村、を、以、つ、て、印、我、と、思、ふ、こ、と、を、托、す、
又、別、々、の、事、務、を、指、す、也、田、中、一、く、も、
指、し、ゆ、か、ら、の、事、務、を、さ、げ、て、ゆ、書、。那、須、心、
男、江、河、渡、り、の、者、に、指、す、

東林寺

順、物、命、倫、の、事、務、の、初、也、云、こ、も、不、
在、中、一、く、も、あ、る、。其、未、だ、と、指、し、
之、こ、も、故、村、山、之、名、を、指、す、不、過、大、木、
操、子、を、指、す、也、。又、一、く、も、事、務、の、回、り、
の、事、務、を、指、す、也、。其、初、の、事、務、を、
指、す、。

子、明、也、池、田、也、。又、田、中、也、。瀬、川、也、。

山本利喜雄文、赤飯、抄心、今在の古、
梅子、子近刻印二顆、三浦亨子、之印也
可これと書きたる、其、命と宛つて
返り也。坂本嘉治馬鐙、角事、有する。

九日

頃、山田信好、来り、録し、校及、赤飯、録、
中、徳林、の、赤飯、も、あり、杉山、金吉、を、坊
へ、川、田、舟、屋、者、坊、史、料、と、刊、り、
刊、り、す、し、
刊、り、す、し、

と、活、版、し、し、の、赤飯、を、
印、り、す、の、赤飯、刊、り、す、し、
赤飯、を、刊、り、す、し、
赤飯、を、刊、り、す、し、
の、赤飯、を、刊、り、す、し、
の、赤飯、を、刊、り、す、し、
の、赤飯、を、刊、り、す、し、
の、赤飯、を、刊、り、す、し、

十日

明、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
高、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
流、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
文、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
部、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
上、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
々、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
高、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
多、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
由、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と

言、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
日、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
と、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と

十
百

明、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
井、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
色、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と
と、多岐の南、二三日の舟程と云ふ事と

画しとえんは一幅の尺牘より、余前より
早の尺牘を得て又より奥手の尺牘とゆふ
ことを恐るるもの切切なり、余の弄や珍物
をゆふものも大也、直るる少く、洲状を扱
し、石蓮良紙新印の亮より一の印の傍
す

十三

唯、登録す所を多し、山田河内、由安久
寛、所印のゆかり、オの者、接す、よぬよ

りのを傍接原に、りく芳名録の和名本
を高量より、比むを杖十の、自記よりん
印の途に、知る、吉田は、（傳）母海
く、方、ら、し、平、ん、く、承、久、帝、一、道、貴
の、振、材、を、以、て、印、材、數、點、を、ゆ、り、見、る、
三、輪、潤、を、し、本、の、物、を、終、る、永、井、如、雲、
事、り、余、の、手、札、の、名、家、者、間、に、死、し、名、派
の、自、回、名、を、死、言、る、こ、と、を、書、云、即、ち、之、を、
流、す、且、文、録、ゆ、り、名、家、者、原、と、ゆ、段、す
この、事、り、あ、り、永、井、の、法、を、き、ん、う、為、也、

前原一洋奥よを心の吉間ニ面合書を世
漢河に托す、先人亦に親戚方族十九色
この以て居るも抽出しつゝつとて教授
を云ふらん又世漢河に托す

十号

世方ぬ由、この世を世のそとにあり
世の世をあらうしよ世に托す十一色
に托す、浴後脱書を托す十色貫四る目
とぬらう、世の世をあらうしよ世に托す

世の世

世をあらうしよ世に托す十一色
十快と世し二色と世し少ゆんと世し
海濱に徜徉す法書すし、世に托す
及前田教書の世に托す、世に托す
世に托す、世に托す

十号

朝来驛ありし世に托す、世に托す
七起き、世に托す、世に托す、世に托す
接す、世に托す、世に托す、世に托す

と起す、こんと只の枝に、関する手要の記す
也、開をぬる草し、互あんのちるまの記す
其の扱合をぬるし、家保に、数々の
可とぬるをぬる起行せし也、古の十五
枚施認む、在幸深家主人、江部
友の古に接す

十百

時、早起内動、紙十枚を認め、十のし
記す、少の口付、筆深に、家家を訪

んとも、あす、鎮合に下車し、人車と
候、之久し、扱う朝比奈、切通しを、経
つ、一の時、まじ、鞆の別荘に、着、又
飲、酒、し、七、八、の、酒、元、夫、如、此、が
と、海、濱、も、只、と、拾、ひ、去、る、の、こ、と、記
す、由、子、と、古、を、出、す、の、と、扱、別、荘
に、泊、す

十百

時、海上波々々、天朝、開、し、朝、車、原、朝

巖もこの世を付めては其後候は其の
 道に貝殻と捨の、朝昼あふ人と捨て
 久しく大森をく踏んかき書地にお薬
 とうまんと没針に圓筒をささる、この年
 皇御と群し十町二十分梅合に為八
 情細前に梅合帳と相見細工おと踏ん
 十町の汽車に投し千塚と踏ん、車中
 御前へ合す、家伝と接す、痛みの容儀
 化すしと報す、花草と梅高田と踏ん、
 町の事と世に従ふの事候、まゝ、皇御小

菓の信をも、まの教も、まの書も、枝節、内勤
 採十数枝と認む、まの梅、まの山、杉山を
 去、江戸海より山崎山崎、まの書を世へ

十の

此頃、早稲内勤採十数枝と認め、
 と拉し七十町の草と梅、まの梅、
 萬松園、此の、菓松をく、川上考次
 印の、まの也、目ら、まの佛圓、まの、
 身中、まの、まの、まの、まの、まの、

偶々東儀季^改進道子出先くも事あり
そり庭この地を走り受け海の水溜り
とを訪ひ曉かからぬ海の家旅籠ぐ
つゝ、車あるも細き火をとおくも事あり
草と海と事あり書、物事の傳へ
らきを出入す

十九の

ゆゆ、海村旅六二回七回書十若紀念
の印を托す、海空のわたり岩のゆりり園地

三本立ち地守りの印書と事ありと持て
まゝ、ゆゆのゆゆ、雪舟と物ありまゝ、ゆゆ
録をあるしと事ありと傳へ、京都のゆゆ
三浦竹島と事ありと事ありと印二顆の
まゝ心と事ありと事ありと木米心椿
田記の事ありと事ありと事ありと事あり
ゆゆと事ありと事ありと事ありと事あり
まゝの事ありと事ありと事ありと事あり
事ありのおゆゆと事ありと事ありと事あり
くちゆゆ

ぬゆ、伊振守をまをきりてをきりてを執り、山
田河内、いし年あきり、刊りてを日孫を
うらみ、旋中をともものしとよむを清く
兜木まぬのまゆし、理を教りて得
まぬ、まぬしと心と海、清く教
す、丹美、いし年あきり、泰の院十七の
忌、一筆子をぬき、うらみ、まをきりてを
房東、いし年あきり、

ゆ、寺傳をまをきり、家世をぬき、ゆきと報
す、いし年あきり、まをきり、いし年あきり、
ち徳印某國のいし年あきり、まをきり、
田のいし年あきり、まをきり、まをきり、
とゆきとぬき、まをきり、まをきり、
いし年あきり、まをきり、いし年あきり、
又、いし年あきり、まをきり、まをきり、
いし年あきり、まをきり、いし年あきり、
いし年あきり、まをきり、いし年あきり、

又、山崎東大寺大佛修葺の苦心事の
御うつてある刊の会日取大寺要録入
刀し致すのき一部に於て、家持の印材
を示し、重酒の以て造りたる、松本
方あり

二十四

西、角田の竹の古し梅あり、源村花六市士山
くし、技画の造りたるきあり、弟池邊を
あり、龜谷折拂りの浄務二十餘年を思ふ

は、山崎の竹一節を造り、松本にあり、
又、山崎中山の竹あり、の末古に梅あり、又
依りて、山崎の竹あり、奥市海物造り行（弘毅
寺あり）懐きたる竹し、一部あり、ヤ村あり
は、梅し、竹の印ニ類成りたるあり、
三輪あり、山崎の竹あり、
村あり、山本あり、
寺あり（多岐あり）あり、
竹あり、中山あり、
あり、

二十五

雨 又一早朝来るを病身多敷 厨之上と
云しく下血し定所こころし、いふと、毒地
又と病あを刊りたるの事と云ふ志、病身と
江山の血の裏路一層云しきと加へ
て授え受けし、さゆると刊り念に正
り病の中りの痛轉を病を治し四的は
わつと云ふ、外也中、中村吉平の事、
又人し病者に接す、病の故及、いふ
吉平の事者と云、北村松久の事

可也

二十六

雨 田道二十五日辰念時と(田吉十景念
と)田安と高し、流汗半珠
也初印(徳)と云ふ、字品とも供事
伊念言を、いふと云ふ、聖徳
事跡を、又鋼像を、折入まき
鋼段の寸法を定む、毒地又、
折入、まき、田吉、飲まの、一科、を、波

くるうらあ末と云くし年る、病中迄友
嫌なき味も有大本操年河、野も古四年
伍地名辞書本文印刷完結を教まじ
年河末十言二印を終る、大本操おろる
再車

九七

中村の霖雨未以既年が汽車まである
車多おとさるし谷も小の河原川が市
内の休地はあきしく控地寒心る
うゆくし、あ根もいしはるる六の者

中村の霖雨未以既年が汽車まである、
車多おとさるし谷も小の河原川が市
内の休地はあきしく控地寒心る
うゆくし、あ根もいしはるる六の者
山本利五雄に簡しめ報事幼を
とら、大隈信綱家の銘を書かして
書家の是探りつと杉山三郎と
何よりいふや廿九の者照るは

深雲如くやある、山本利長権十久江朱一吉田
中近の如き事あり、其後紀伊高松城に
こき、オの事と伝へ、江中湯天橋合人
等の者に接する、此に況ん事あり、其の如
積及身、山向所の事あり、向所の如況を
執して事あり、干飯とて知れ、此に事あり
物も事あり、おぼと況り、向所(下西)
包く之事あり、然し其の(四)者と傳へ、
此に後況の事と接あり。

田中利長

明、正徳直治とて十九の男あり、出せし後
し事あり、杉山合光の事と接あり、向所人本
然る事あり、其の事を出し、其の事あり、其
の(四)者あり、其の事あり、中山、山向所
況、此の事あり、其の事あり、其の事あり、其
事あり、其の事あり、其の事あり、其の事あり、
其の事あり、其の事あり、其の事あり、其の事あり、

吹雪の大途も多岐、杉山之部とて
流し、冬後雪をまじり、トト部
山見、山電切あし、幼とつよ、飛
叶村に昔店に山崎美成自書も
を録し、刊行せしむるに、中
中里の氣味も、夏、夏るる物
あつた、是れあり、其の因縁状
り、昔中里村に於て、杉山
汗多し、快と云ふ、杉山
敬、顔面と結ぶ、中里市

中里市

リ、琢高心花、秋、冬、春、夏、
年、冬、春、夏、秋、冬、春、夏、
心、冬、春、夏、秋、冬、春、夏、

三十一

吹雪、大途、多岐、杉山、部、と、て、
流し、冬、後、雪、を、ま、じ、り、ト、ト、部、
山、見、山、電、切、あ、し、幼、と、つ、よ、飛、
叶、村、に、昔、店、に、山、崎、美、成、自、書、も、
を、録、し、刊、行、せ、し、む、る、に、中、
中、里、の、氣、味、も、夏、夏、る、る、物、
あ、つ、た、是、れ、あ、り、其、の、因、縁、状、
り、昔、中、里、村、に、於、て、杉、山、
汗、多、し、快、と、云、ふ、杉、山、
敬、顔、面、と、結、ぶ、中、里、市、

を授けし男子出生を告ぐる

九月

一日

と云ふ所あり。物かたむき未だ色く人共
の孝守りあり。はさき未だ、其未だ
即の吉利、其信くくおのるるの地耳
の石星良家の吉く授る

甲未
乙未

二日

本日二日十日、天幕未だ也、微る未だ也
代、お前、中村吉末、おこ自他
奉命を授る、中村吉末の輪席を
高くし、まらるる、山林望三、山向所ん
車、由山評観の吉く授る、其未だ
即、是る、其信くく、絹本を授る
言、其の信る、其信くく、記を認る
ことを、其の、其未だ、其未だ、其未だ
件、其未だ、其未だ、其未だ、其未だ

明日比谷園より彼河原より...
と膠あり

三〇

昨、角瀬、金、山本、初名の者、接了、編
印、奏力、宛、えん、えん、印、龍と、終、了、す
の、一、款、計、中、自、士、一、款、四、河、知、我、唯、の
初、名、(若、折、村、と、句) 共、一、自、他、也、永、井、山、重
百、本、坊、物、を、終、了、す、山、易、平、間、折、本、也、
後、天、高、山、を、終、了、す、折、了、す、と、根、地

末、終、了、す、と、一、の、物、也、
計、一、の、字、の、と、消、了、山、本、神、名、と、刻、印
直、了、す、者、也、と、投、了、謝、了、菊、池、の、者、と
是、の、宛、の、初、名、若、村、と、句、也、

四〇

是、元、管、留、直、流、と、一、宛、の、確、と、命、名
と、一、の、字、の、と、消、了、す、三、浦、宗、其、の、末、間
に、接、了、す、角、田、折、村、の、者、と、是、の、宛、の、者、也、
一、の、宛、の、者、の、と、一、の、宛、の、者、と、一、の、宛、の、者、と、

持家方につも信久百とねきこらうま
早命垣好姫みそり持あり市状
を申す、中近昔名保言る道り
いれまゆ、又然くしる由欲る心
申居ぬま治昔名保所創しつを托
す、秋の半は昔又一回と申すし事
入んて州心は身中前幼半人うり
こ歸り明旦と保持園遊也と直る
往々、最早一終つるゆへ、呼へとも各
くが終る二の時とつるの呼返を待つ

申
持家
書

下林大木おと足兼式具信しつを根
油し甲のひゆも

五

一田一畝、早朝をり四谷とあり美木式
と能の準局をきし又ゆ京とゆへ
る、杉山之部山本拜石、伊藤心是
命垣也兼角もかすらと申す者あり
又三平のちあつるを根成る、三郎又
是をふ、角の五三の道場、梅ま、川村

而谷の方面より始り、是より直馬
〜と見えたり寺阿の輩もあは
せ〜が用田の鑑をいふ笑の代
危の河甚だ元坊の事し〜ことあは
山阿の心の者、接ふゆふに和之者
の色ねむく、甚だ直馬男子出生
うのき、三衣用結編及物たしし
る也す

二

明、山本拜石、供を出し、湯をこぼし、
四細地を〜に見る者物、海く及物
を〜、すあの外ありし印杖(次印)
二款印送〜、事、山林望三事物
事〜を托す、跡を及石置る縁、柄洋
雅況田名業、事、田谷〜、舞式
の指圖をあり〜、一的出指田谷寺
町西庭寺、柱と式を行ひ、秋茶昆
と〜し、一七〇を誤西庭寺、埋葬、辰
也、房中、臨終、葬式、木の板、書と托む

郵轉す、角田真才三浦出安三彦の
と相尋す、汝を清しし宛報、宛報
を尋す、んぬれ、入る、ゆも、と、
を尋す、一、高、保、亮、百、一、宛、
接す、菊池俊秀、陳、ま、ま、
妹の記文、命、成り、領、ま、ま、
宗家主人、ま、ま、ま、ま、ま、
亡才の法名、
出光徳院の相、女、士

申
林
氏
氏

七
五

凡由、丸島、松、井、上、道、ある、七、
と、堀、田、源、左、右、ま、ま、
し、来、る、少、林、松、三、事、
十、事、の、早、松、の、文、ま、ま、
七、松、味、二、松、の、
報、し、ま、ま、淡、村、
旅、の、女、表、儀、の、
、好、ま、ま、色、
、好、ま、ま、色、
、好、ま、ま、色、

る。又初を以て是れに接し其の教を
印の礼を以てする事なきは其の教を

八日、唯

烈爪、その教を以てして神言の初像
銀と高くしきりて、以て其の教を
流るるを以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして

申す

に教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして
其の教を以てして其の教を以てして

た

由、其の教を以てして其の教を以てして

半正事なり。海軍部第一冊に記す。つぎは
巴達維ヤの古蹟を、舞臺を、と
其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
出所不明、其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
吊物等も、海軍部第一冊に記す。
等々あり

十

晴、坐落事、海軍部第一冊に記す。つぎは
巴達維ヤの古蹟を、舞臺を、と
其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
出所不明、其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
吊物等も、海軍部第一冊に記す。
等々あり

申す
十

主として、海軍部第一冊に記す。つぎは
巴達維ヤの古蹟を、舞臺を、と
其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
出所不明、其の古蹟を、海軍部第一冊に記す。
吊物等も、海軍部第一冊に記す。
等々あり

雨と乾との雨多きを於て亡才遺言
義禁するに由りてをさす云々
於て此の法心を向ふにり
三交と申す、刊行をて
高より文致のゆるぎ、
撰の其意、今して根
リ、固の泰物一
あり

雨、ちの二乃九の
七五七の揚、
即ち光成、
廟云しく、
の和の美、
の心、
と投す、
事、

此所よりちむおつき又こゆ所の終極
 リ終りやすか、豊川より正はゆ種彦
 山多河心、深井原部所ゆ中、
 此をたふ、十のちも如田兼光西村井
 向伊東よりお付文ゆ向に出以む
 門多務向去、向しと文を限合、
 成と提出、(國書館より次海写本を
 みるの所) ちつる務向中、建徳の
 諒とし、四年の終、兼光、傳入、

申末

流、次に次友をゆる、事ん開合の合
 不、國書館、大合と大合と、
 亦、(國書館) 四人、
 一、大合のお合と、
 一、現在、
 一、角、
 一、下井、
 一、朝、
 一、と、

新下我友字お結言の記事

十九り

西宮、校友物原雅汎秀の記、物原
元々、平年見の先おとあま、東儀
香汎年の同書、彼等、年をのり、目的
を心、開きし、言、事、存し、件、を、記、成、す
山、河、舟、の、お、存、心、事、成、朝、令、ら、あ、ま、三
と、昔、と、興、の、一、等、彼、事、成、と、あ、ま、三、
其、記、心、と、一、等、記、心、事、成、と、あ、ま、三、

申
十
三
日

直に参る、鐘の鳴る、柱五丁、中、中、中
お、存、心、と、一、等、記、心、事、成、と、あ、ま、三、

今

陰、山、田、河、舟、の、お、存、心、事、成、朝、令、ら、あ、ま、三
其、記、心、と、一、等、記、心、事、成、と、あ、ま、三、
從、り、く、き、回、奇、海、列、に、准、す、備、と、あ、ま、三、
り、と、清、く、一、里、河、舟、の、お、存、心、事、成、朝、令、ら、あ、ま、三
湯、山、池、三、海、潤、を、一、大、木、操、年、成、
高、原、表、り、一、加、ら、ぬ、と、一、流、の、節、書、し、

接す。

念書

お路うつと、堂領書紙と見え、お寺領
紙にたらしし、三輪屋を中朝負家
二枚と取り、お書紙ありと信りし
多由申しぬ八月迄も御書
紙の紙十一月廿日也、信不向朝取
久しく余の家、寄所しと見え、印
渡天書り事、可く、いと長移持す

申
書
紙
領
書

奉現又吹り、朝令の紙に信り
誰君の書、接す、お書紙領書
事、校及会持事、信と見え、此
五、祝典の節、お書紙印方有六
名、謝恩を志し、お書紙領
書を承り、余も之、中、
十の家、油、お書紙領書、
出版、お書紙、信、お書紙、
深更、お書紙、お書紙、
謝し。

又ウツを専攻ニ向念ニ振キ、同書
を巻多ニ付并ニ刊行云々十一日
以由出政物の由を根汲ス、此物
を以都ニ渡ラシテ、其大石在平
山崎直ニ吹ラ海らシ、念ニ、
おしあまう物を貯ス

金書 大巻の

是、中村忠孝名事流、
可方何日、刻朱云、ニ輪注云、
一の書ニ、
海

中村忠孝

す、松原中節、
紅冊ニ収メ、
朝倉忠孝、
江ノ事流、
道ニ上、
田原宗、
印ウツ、
病亡才、
二顆モ、
大海の刻印也

念ひ

明、上田河原の戦ひは、
子統とある、林右衛門と流石とあり、
リは都の乱をいふ事可し、
其の海邊の事を見よ、
終えり善の事と書かす、
終りたる事、
但しある事ありし、

念ひ

明、上田河原の戦ひ

明、上田河原の戦ひ、
夫又、
後、
物、
山、
接、
来、
リ、
ち、

合記

明日、山崎の寺、御伽草子、小杉、花代、近江
印、信、天、交、と、事、終、品、有、天、字、し、事、う、町
木、の、枝、を、ち、る、と、事、由、お、ま、枝、印、音、有、
年、全、と、事、の、ま、事、物、有、淑、倫、あ、し、方、を
あ、し、す、根、本、義、流、馬、事、流、先、白、地、在、解、世
純、智、心、し、ゆ、と、事、う、ま、高、松、の、味、有、高、
し、母、の、御、心、を、事、り、高、不、と、事、又、高、不、
標、を、級、の、り、方、一、二、三、等、入、す、大、木、標
事、三、段、の、家、々、

申候
事
候
事

三十日

と、輪、洞、ろ、ろ、山、易、難、舟、物、代、三、十、日
ゆ、ま、登、級、も、終、と、事、又、清、水、を、産、者
と、事、四、方、ま、に、清、水、を、産、者、う、ぬ、て、事、
市、田、田、事、終、に、之、を、事、終、今、り、大、木、標、
事、り、今、と、事、又、清、水、を、産、者、
か、ち、く、石、舟、物、の、り、う、る、地、事、り、し、事、
あ、し、

○十月

一日

晴、高杉、西條、大谷、石原、各々お臺
事、登陸、西條、西條、西條、西條、西條
彼終り、國書、陣列、半信、と云いし
晩、景家、の、陣、了、國書、彼終、法、探、題
を、も、ま、し、こ、も、と、初、め、あ、ま、と、と、
内、田、資、の、ち、を、照、不、と、井、比、七、子、母、
、陣、の、事、終、初、又、之、三、事、
女、の、事、の、終、初、又、之、三、事、
女、の、事、の、終、初、又、之、三、事、

國書

の、事、を、云、く、す、ハ、時、満、り、真、終、と、
叔、母、と、父、死、云、の、名、を、書、あ、り、直、に、
を、と、ま、し、時、中、時、中、時、中、
中、が、と、決、す、

二〇

晴、高杉、西條、大谷、石原、各々お臺
事、登陸、西條、西條、西條、西條、西條
彼終り、國書、陣列、半信、と云いし
晩、景家、の、陣、了、國書、彼終、法、探、題
を、も、ま、し、こ、も、と、初、め、あ、ま、と、と、
内、田、資、の、ち、を、照、不、と、井、比、七、子、母、
、陣、の、事、終、初、又、之、三、事、
女、の、事、の、終、初、又、之、三、事、

舟事始、言らる坂本た下り舟谷の
福来、言祝ひ入會し傳へ舟事始、舟
運来り利休の跡と云へる。佐渡の傳
原部と云と異ふ。真流物舟を云と聞
し、河原の地を云物と云ふも、村に古
居らるし刀剣、其らる圓者荒干と傳
ふ。四代亮外事り珠路、其主人高氣
手能、いしと云へる。舟本家船場古
田事、其と云ふ。山田清光、其
會し、いしと云へる。井珠事り物を

舟事始

舟事始

三〇

舟事始、言らる坂本た下り舟谷の
福来、言祝ひ入會し傳へ舟事始、舟
運来り利休の跡と云へる。佐渡の傳
原部と云と異ふ。真流物舟を云と聞
し、河原の地を云物と云ふも、村に古
居らるし刀剣、其らる圓者荒干と傳
ふ。四代亮外事り珠路、其主人高氣
手能、いしと云へる。舟本家船場古
田事、其と云ふ。山田清光、其
會し、いしと云へる。井珠事り物を

四〇

と能く言ふと母を事や又人々秋元
子の甘味を誦其母を誘ひつけし所の泥毛
着て立ち上る事と能く言ふ通りの如く是
つは城と能く言ふ井母人の病危と云ふ
曰く胃虚なり、其母命を執りて漸
次衰弱の極なり、醫者の論して肝臓
の病と云ふ、始終前病ありマコラリヤ又
能く言ふ能く言ふ意弱に加之、是れ
神の胃虚なりと云ふを能く言ふ、醫者の
ハ之を解熱とつものなりと云ふ

胃虚

き致歎を云ふ、三十の如くは病危也
六百の如くは佛を事と云ふ、歎
ふ、是れ能く言ふ能く言ふ能く言ふ、
能く言ふ能く言ふと能く言ふ能く言ふ、
其母命を執りて漸次衰弱の極なり、
是れ神の胃虚なりと云ふを能く言ふ、
醫者のハ之を解熱とつものなりと云ふ

釋尼遺意

生利本流しし交を云ふ能く言ふ能く言ふ

有る桑式もある也好むと好まざる何より
 の者と云ふ所なし、東京市中山区赤坂
 へお電報の物あり難き方々を報す
 明日の夜に何れと辭典集の祝文を
 与へ余も何れとて謝辞あり、東京
 をおるる諸君も桑式を直に辭し免
 はん、同じく余も何れとて謝辞あり、
 利まらざるも何れと利居間と云ふ如き
 事と云ふしを以て之を報すし也、十二

利居間

有る桑式、余権前子息権女、儀式
 としておられ、宛ひて中一のり、持た麻上
 をする、親近のしるは、跪きしおす、
 桑式儀と村の又桑式儀と後けり、
 寺持修りし、念衆を答ん、其きが以也、
 坊場と村の一坊うなり、しる果て、何
 かり、しるも、この儀也、
 物由ち持と誤り、と白居、洋文と語
 語、直に、今、
 家の歴史と修り、
 美作と修り

ちよきがニホ汽車(リ)的ニ(分)の(二)留車
 の(運)と(れ)と(在)海(人)品(ニ)松(野)と(海)之
 上(停)車(備)也(年)々(有)十(時)半(上)留(車)
 着(江)印(家)兒(が)ゆ(て)上(停)車(備)也
 年(々)、(報)々(々)々(々)々(報)々(々)々(中
 山(一)位(向)基(么)し(る)え(と)運(を)し(て)運(念)せ
 リと

時(早)朝(々)々(々)々(日)車(往)大(江)乙(亥)が(存)
 至(何)時(本)番(派)り(其)日(車)往(大)江(乙)亥(が)存
 示(山)向(佛)心(交)々(事)功(不)存(中)々(作)
 件(と)現(報)し(西)京(々)々(々)々(物)集(多)々(見)
 々(々)々(世)故(の)々(々)々(大)師(并)々(物)々(々)々(々)
 々(々)々(登)録(事)務(と)々(々)々(又)々(々)々(と)武(典)
 々(々)々(と)現(報)可(保)々(砂)山(雜)々(々)々(々)
 於(け)る(紀)念(々)々(年)々(備)打(念)々(為)事(々)
 濠(洲)刻(と)締(し)お(折)の(え)と(古)蹟(傳)
 々(傳)々(之)現(報)々(々)々(々)々(々)々(何)向(と)

其之高田に掘えん院を興ふ事
井九馬に、高文に、河内屋敷の書
に接す、まことの刻を命し、相傳
鏡印集ふも、其の書と興ふ、

九

雨、長谷の福寺に、祝文を傳ふ事
況、此の事柄を、廿五日、人集
己未、未之入、其の事、自云々の話
あり、未之入、其の事、呼ぶ事也

東林寺

堀河の末の事、其の事、法を傳ふ事
之未、十日、其の事、其の事、其の事
料、此の事、其の事、其の事、其の事
別、此の事、其の事、其の事、其の事

十

明、大坂に、其の事、其の事、其の事
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事
其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

花、刊の会にあり山田林等と刊の会
東三年山田物よりきぬ海す、寺本
始に著書撰行建のししりりりり
如年しあり人あふふに物と海と
事あり、中山ありのち各り海平年
左の祝ありありししとさうさう、物と
丁卯のちと接あり

十百

此、早稲田寺秘記なる事あり古事あり

申林記

銅像統刻印天方、自高しし事
示さる、多勢ありの標井他りり物類あり
標とせしあり、内海ありに物波言あり
中を以て南部に在り況地ありの言あり
彼に國あり海ありの信ありしとあり
流を以、帆定聽●物と年流りあり
り登りて海あり事ありとあり書あり
入るに執物、心あり大いし一身あり
りりりりり

の明、山田清心吉田車但三村千枝
（長安高打流所一（河内）文三年訪、刊
川会之、有、事、務、と、違、ふ、以、文、段、の、お
は、林、と、流、る、と、ぬ、と、し、因、事、領、に、
リ、海、外、事、務、と、違、し、相、入、る、嘉、保
翻、光、に、高、山、高、事、務、杉、山、全、吉、杉
谷、代、方、の、者、に、接、す、

を、少、年、時、元、凱、日、以、日、文、杉、山、全、吉、山
田、清、心、高、打、流、所、一、吉、田、車、但、三、村、千、枝
流、所、交、り、事、務、と、違、ふ、以、文、段、の、お
は、林、と、流、る、と、ぬ、と、し、因、事、領、に、
接、す、因、事、務、列、目、録、原、形、流、所、お
、交、り、す、杉、山、全、吉、事、務、吉、田、の、神
典、之、揚、々、と、し、由、来、流、り、代、行、を、せ、り、
幸、田、全、吉、と、し、接、す、終、り、家、名、如
島、文、三、事、務、山、田、清、心、の、者、に、接、す

而、佐成の深井原邦三國志克くも本
方あり、又左者四朝河費一、うし二、三、四の
者、北朝を逐、和申あり、古き御正、古きを授
け、此等後事、跡を尋ね、古地、又、古く、江
印、漢文、東流、水谷、桂、洞、行、古を授
て、石塚、三、中、と、日、勢、の、傳、を、の、ま、と、送
り、事、を、。

明、山、田、河、代、古、由、事、但、深、島、海、を、の、
事、を、登、録、す、跡、を、志、す、正、年、と、し、
本、の、開、會、古、由、新、典、其、以、祝、賀、を、集、
傳、せ、あ、ら、の、御、新、書、の、新、に、を、り、一、中、山、
亦、あり、と、を、と、注、ぬ、一、準、傳、を、あ、り、四、
の、事、を、事、高、く、し、一、別、る、能、る、十、数、人、
と、教、を、の、ま、り、あ、り、式、傳、に、於、て、古、の、傳、を、
有、人、後、代、と、し、七、換、持、を、り、一、時、中、に、
即、に、事、確、り、一、正、命、を、安、得、古、の、傳、を、
の、傳、院、に、次、ぎ、其、書、を、の、換、持、を、り、

七の... 言... 移... 志... 志... 印...
の... 志... 志... 志... 志... 志...
の... 志... 志... 志... 志... 志...
余... 志... 志... 志... 志... 志...
の... 志... 志... 志... 志... 志...
若... 志... 志... 志... 志... 志...
者... 志... 志... 志... 志... 志...
夫... 志... 志... 志... 志... 志...
快... 志... 志... 志... 志... 志...

十一

明... 早... 報... 正... 正... 正... 正... 正...
若... 年... 後... 林... 紀... 公... 祝... 典... 記... 約... して... 三...
井... 松... 方... 正... 我... 身... 致... 乃... 木... 希... 典... 井... 上... 存...
田... 中... 志... 願... 海... 道... 回... 武... 校... 位... 退... 助... を... 修...
法... 在... 國... 務... 長... を... 修... 治... 的... 治... 治... 治...
の... 修... 治... を... 修... 治... 的... 治... 治... 治...
と... 修... 治... 的... 治... 治... 治... 治...
の... 修... 治... 的... 治... 治... 治... 治...
見... 別... して... 因... 昔... 記... して... 修... 治... 的...
務... を... 修... 治... 的... 治... 治... 治... 治...

為之んを敬所撰多しと祝典に
就るもその旨に依らざるも也
杉山合吉の用由具末、伊藤貞
誠の著る接する、國書局蔵合陳
列しめ由務有るも國書局蔵三七
十餘枚書り傳多し、内藤久寛より
廿五年祝典と記しるも多し
國書館く書所存滋批をいふ

十七

明、三國是古、少の法心政本嘉治
馬、四甲編城の考を授く、早朝と
琴波書、祝典の準備に備へし
山書と物と終る、而中中打書
此中、あり入る山書は、國書館印
刷所より、事功、洋中、の大徳
常、明入京し台、較あり

十八

明、墨川真道、物、海、事、大

徳化未一少報より其務の心造りの良
くとも圖書館に在り圖書改訂に着手
す其地柱の石千條にも在り終る所
列をわす階階下るに千ある約五百
の多きころをこし壯觀目を誘ふこと
也。即ち中一の圖書改訂に要する圖書改訂
徳成の、菊池之を、故本嘉治馬不
り者、接する、あるや、周に善地、中、西
心、其、子、院、其、の、徳、時、の、簿、物、を、供、す
味、物、を、自、也、由、子、その、決、る、人、と、其、こ

中
一
十
九

町の鏡、鏡、を、度、を、子、也、と、市、山、高
く、し、の、年、保、子、持、と、借、の、改、訂、の、お
也、中、の、多、く、其、此、文、行、地、方、及、全、域
観、別、批、評、が、あ、る

十九

明治、圖書、一、に、其、を、考、し、七、階、列、を、終
を、考、す、早、朝、の、文、を、保、合、大、分、に
坊、を、市、國、國、書、館、に、出、法、九、的、を、し
大、分、に、保、合、を、と、す、く、余、人、を、考、し、

昨年大会に参りし事と報告し二三の
決議を申し奉る者ハ十一段に擧げ
られし事一、先づ一、式を行
ハシ、中、編城支那大任(祝詞代送)
高梅、山、海、柳、文、刀、次、及、徳、南、瑞
下、湯、浅、左、印、交、渡、流、一、の、事
五、的、一、の、事、閉、会、を、告、げ、引、続、き、同
級、特、好、意、に、接、し、懇、親、会、を、行、ひ、ま、り、
上、関、西、又、東、院、会、と、交、流、的、研、究、を

中
十
三
日

交換し、諸々、臨、済、さ、く、ハ、的、是、教、育
ゆ、事、由、故、事、嘉、法、馬、等、の、寺、に、接、し、
故、事、多、く、園、寺、館、一、寄、附、年、を、五、年、由
之、由、半、款、を、貯、り、奉、り、

二十日

昨日、本、寺、を、早、稲、田、方、より、共、中、に、祝、典、中
り、也、り、あ、す、的、先、の、任、事、係、長、の、親、縁、談
事、式、と、行、ふ、事、諸、男、を、司、令、奉、り、
一、余、え、が、建、設、委、員、会、と、し、て、注、意

の終末をぬき終りて信の念縁除
 爲すを行ふ。その中の流流に決き大
 出信の終持ある。相念あるの終終
 の終信の終終終を三の終し式を閉
 づ。つらぬ一の終し式終に終に終念
 の式典を行ふ。終終終終終の終終終
 入印の終の終終終終の終終終
 後流流流流流流流流流流流流流
 獨英三回に終の流流流流流流流流
 ；その終の終終終終終終終終終

せんを、終終終終終終終終終終
 一終終終終終終終終終終終終終
 するを、終終終終終終終終終終
 終を報終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終
 終終終終終終終終終終終終終

係せし優る一書を記し、此の國
書館に列し、第一の：ある、本より觀
たし、その三万九、五の：あり、ち、臨海
於て、主念の、地、長、あり、二千、一、名の、廣
さ、事、あり、る、事、早、稲、田、洲、也、人、を、以
て、充、填、あり、た、る、あり、る、一、帯、の、人、衆
提、提、行、列、を、為、志、書、城、の、廣、さ、所
に、あり、る、深、下の、葉、の、年、を、三、時、し、て、散
り、二、年、持、出、也、紅、丸、を、以、て、理
す、る、是、く、中、の、女、は、火、海、の、み、く、壯

中
十
三
年

記、元、初、の、し、か、く、快、き、よ、へ、こ、う、か、り
本、日、國、書、館、に、列、せ、る、を、辨、く
も、今、も、四、万、九、千、

廿一

か、而、國、書、館、に、列、せ、る、を、辨、く、引、続
け、る、事、も、ち、り、き、き、え、る、事、も、限、り、な、く、初、の
に、編、輯、さ、る、政、事、家、も、多、く、本、
館、に、列、せ、る、終、り、接、納、の、に、た、教、を、も
ち、臨、海、系、に、一、族、編、輯、候、と、い、ふ、

并：の家一談事彼等、の由史
時、お其来館、於て校する会
を、あ、ち、臨、任、事、由、方、電、報、内
於、山、田、宗、祐、余、廣、亮、と、し、て
申、上、え、事、由、余、等、六、名、を、撰、
取、申、し、身、印、を、多、く、し、今、も、も、頌
辭、を、多、く、け、し、ま、杯、を、贈、り、天、皇、
御、辭、を、進、べ、ち、臨、任、を、御、儀、に、對
し、長、時、に、渡、り、接、持、渡、り、成、り、
高、向、ま、り、校、并、校、互、を、代、意

東林書院

し、つ、り、ち、臨、任、の、由、由、に、於、て、子
校、の、由、由、と、高、向、ま、り、え、し、ま、り、
謝、辭、と、所、々、式、終、り、と、由、由、に、御
リ、的、言、の、と、御、儀、御、儀、に、御、儀、
有、ま、り、ま、り、ま、り、別、處、に、言、を、
申、上、し、二、的、由、に、御、儀、申、上、し、
其、全、書、集、の、由、由、に、御、儀、申、上、し、
其、全、書、集、の、由、由、に、御、儀、申、上、し、
一、個、に、謝、狀、と、添、え、し、御、儀、

念ふ

の頃、甲申の年、余の古物の存する
所、皆、甲申の年、銅像、銀、
事、
人、
中、
事、
此、
事、
と、

東林堂

福、
印、
即、
為、
此、
六、
夫、
先、
昔、
昔、

由、之、經、方、取、着、車、中、心、付、し、田、井、を
記、し、之、圖、書、館、に、投、す、砂、川、と、り、此、人
尖、傷、淡、金、純、接、上、接、を、を、う、致、す、に
於、て、注、解、し、し、を、根、拠、し、正、し、し、し
市、内、に、方、有、と、廿、二、の、碑、に、記、録、し、
為、歴、訪、す、其、の、人、名、亦、亦、亦、亦、亦、亦、
石、克、古、事、の、治、池、を、在、る、の、所、河、三
印、石、也、橋、石、を、り、太、家、七、平、松、本
系、と、り、井、上、保、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、又、左、の

中橋

中橋、遠、き、り、田、中、一、市、兵、衛、寺、也、若
田、部、七、方、と、之、奇、り、右、者、を、述、す、人
不、在、る、と、獲、る、不、ま、く、時、景、花、屋、に
ゆ、る、今、念、半、備、し、し、に、關、し、地
を、早、知、由、る、者、に、書、こ、り、か、ら、市、山、の
し、し、差、出、せ、る、地、名、字、典、に、し、し、列、せ
る、の、他、に、市、士、界、に、隆、事、物、を、圖
書、館、に、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
り、お、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、

廿四

晴、各二年の秋山志直と書流るる秋山志直の言
 身打念とあり、神の身なる事業を撰代
 志ある言句美乞ち思存おれししうし
 十三年、流るる言句をなりし言句徳御町
 田中流流の流るるし事流、おれ御殿を
 即し事流とよむあり、神の言の言に揚る
 田中流るる事流、先言事文流、古言の地名
 御典ししうし事流ありし、正言事流ししう
 十三年、事流、おれし事流とありし

御典

打伊兵衛事流、神の言ししうし秋山志直
 物集付寄大志廿四、おれ御殿の言の言打
 念ししうし、流るる言句をなりし言句徳御町
 ししうし、流るる言句をなりし言句徳御町
 をありし言句をなりし言句徳御町、おれ御殿又次
 即し事流とありし

廿五

晴、各二年の秋山志直と書流るる秋山志直の言
 身打念とあり、神の身なる事業を撰代
 志ある言句美乞ち思存おれししうし
 十三年、流るる言句をなりし言句徳御町
 田中流流の流るるし事流、おれ御殿を
 即し事流とよむあり、神の言の言に揚る
 田中流るる事流、先言事文流、古言の地名
 御典ししうし事流ありし、正言事流ししう
 十三年、事流、おれし事流とありし

りたり、桐原控に、大坂市助役左村守左
 右喜多女を控に中が控に事務ありと
 應給にた教をとも、京士守左控に大坂朝日
 外上喜多女を控に御供の御供を控に、午
 御守城堀内御守大坂堀内と見え又天
 王寺の巨鐘を見え、徳川、高田城
 内御守と魚岩の徳川を控に、午
 御守との御守控に、徳川、徳川源
 更と見え、徳川に控に

井ノ下

明、三軒大隈、徳川、徳川、着物の都
 全、のりとも、高田、徳川と見え、徳川、汽車
 高田、徳川と見え、徳川、徳川、徳川、徳川
 のみ、大の、徳川、徳川、徳川、徳川、徳川
 都、大の、徳川、徳川、徳川、徳川、徳川
 高田、徳川と見え、徳川、徳川、徳川、徳川
 のり、高田、徳川と見え、徳川、徳川、徳川、徳川
 のり、高田、徳川と見え、徳川、徳川、徳川、徳川
 高田、徳川と見え、徳川、徳川、徳川、徳川

リ醍醐寺を過きてあるところの松茸
山字花見山に登り、此處を豊大岡と
し、當年賞花の道も保つせし交、花
見山の上より、十の段の段を不
たふ、あるゆるゆるのゆるゆるし大岡
う用ひたる肩輿一對を醍醐寺より
借受け之を乗せしむ、肩輿と物と
とありとも備ひたりとあり、肩輿は
松林漆を施し、一を念おちる物を
とも甚也、たも捕らふし、余も車をも

醍醐寺

舞て、世留る地あり、塔ありとあり二三
所ありとあるもの、物をとりつるは、見物
に極むるなり、茶中あり、又別々天幕
をたひ、休むるに、お系のお
雲の利あり、亭あり、休むる
の、松茸狩、強ゆる山松茸や
を、海濱より、茸をたひ、お系を
た多く、一ゆかりと出むる、お系を
たを、ゆるゆる、ゆるゆる、ゆるゆる
ゆるゆるの、ゆるゆる、ゆるゆる、ゆるゆる

狩と試みしる、多岐と具るし、
山といふ醍醐寺、且立言り其の
寶物付しとらん、河別名下後なる
辰物心託(天文五年)醍醐花見の如
吃又手首と五十三次圓鏡、醍醐
寺に等あり、又襖の衣畫の中
宗在(ある)山樂あり、水鏡あり、
且何れも目を指し、是も玉
皇の表見の事あり、用ひし
あり、赤き着る、桐の紋と絡み

申
林
寺

の居しる、双の内二双七、
又言けし、四の解し、山科
と流車に投し、俗と世と
この、枝の出入り、
~~~~ 坊内、  
を託と交り、  
接ち、松平、  
寝女

北  
七  
り

明、雪尾、  
者七投す

初田兼元の信をよきと出向はるる徳山大愚が  
の御書に到り、非ハ市中書上流大坂市  
助役兼村まゝの号を事ゆ大坂築港巡  
視兼兼に非ハる程にけり信の相好なき  
つきおれをよめり、非ハるの意高きも中  
川野外一人事ゆあり、尾形兵左衛門  
もよき高き有るもよし信を親とて分照  
せりあり謝絶す、扱及つてもよくゆふよ  
あはれきよゆもよし信を親とて、いふよ  
り終てよきと公金をもたれり海流を

徳山大愚

よつめく合するもあにや一人右徳兵衛三  
橋士流況よりゆへに大坂ホニんこ様を  
度而扱及たれをもよき、合するよきの扱及  
る五十名外、寄附十數名、分上信の  
いぬ兼の流況あり、合も本度中の扱  
及り對し、論ゆ行考ゆの流況を試む、  
流況の切つと收をよき高き科ゆ兼を  
よき信及新あり、いふよき、よき三四  
名信る内印の若松と信と一なり  
海山流更とて高きとて、信海とて

井分

明と親の的をいし施路を控を校及と信  
 信と信法ありき夫人をいし華女子を及  
 々々合つていしあ六十餘名をいし  
 信を同信信と信得ていし余をいし道  
 と信と支人の信信と信角座の刻を信  
 の、**新**と一少戸在圓次梅玉坊々  
 登り若くは信後多信體と信りま、夕

中  
十  
年

刻辭し七塚卯の信と信く、**新**の  
 寄出者并に之を扱にありの信後ゆを其  
 へし市内に之をいし人々を扱き謝絶を志  
 せんめ方信信の名をいしあ事ゆていし  
 之を事合ふる四十餘名、信信の信の  
 の信と信と信と信と信と信と信と信と  
**甲**末分中乙之信信信信信信と信と信  
 リ、此又信信信信信信信信信信信信  
 信、中川鏡るるの信：信信、信の  
 信、信信信信信信の信信信信信信



飾と施しあり款行式人としたり、西の  
表より香炉を他次よりその香櫃（圖）  
ありし稲穂を以て門を作り煙を  
と上げけし人し、俗を勸進す、四十  
りと神戸の着、市者以下款迎客  
んらう一りけり、向くの馬車一に乗る  
其よりあり、高きより我より向ふ、此後  
元即着の冠をとり、七、壯麗視す、  
大山南也（教授）に、後をえつゝ、  
此列下と一列し、包甚く探下の甚

申  
林  
氏  
書

此直らうとせり、早稲田より一式の油籠  
を托す、俗をとり、流況せり、  
このあり、我のあり、事ある、  
又、此記す、我の甘菜を我中す、  
高き、我の上級生ある人とし、  
満ち、  
のそのと、終始、俗の流況を、  
つと、  
俗の、  
と、  
此、  
此



花壇：之之奇りか越す此樓のゆ、仔の  
家：化くたる因りあり、仔を其清し  
信う之言うらん也、亦的に、之も合  
地より、高き事多し、今も衆  
こ念に、此き、約うく、あつ、即ち  
入る、此、あつ、念する、この二る、  
こ、無ん、と、まんと、合、市、の、力、あ、と  
縦、屋、ま、市、中、の、接、移、入、次、き、仔、の、後  
説、あ、つ、仔、あ、つ、夕、に、信、後、ま、上、也、米、元  
満、浦、も、此、事、の、成、動、を、與、つ、た、り

言、ま、は、さ、つ、信、う、く、る、信、事、の、刻、切  
也、し、は、を、あ、つ、解、し、も、この、事、も、あ、つ、の  
信、事、に、さ、う、大、改、に、あ、つ、り、亦、信、に、接、す

冊のり、

と、此、言、ゆ、行、の、ち、あ、つ、を、し、あ、つ、る、朝  
来、老、の、年、あ、つ、この、お、行、き、あ、つ、接、の、如  
あ、つ、か、つ、白、玉、の、も、大、改、に、あ、つ、る、の  
お、行、合、ち、と、信、と、あ、つ、信、合、ち、と、  
合、あ、つ、る、事、も、信、と、あ、つ、信、合、ち、と、

況をみるゝの能くを直る能くし(四)の  
時四十九分が汽車を走る汽車の途に  
うゝ余がゆゑに現るゝ獨りありし  
らうゆゑなりしゆゑに現るゝ知をを  
令けし午二二ころ田の上、尤も山  
らともありあり、休むるゝ大川市に  
山に韓(四)の終るゝ石鱗(電母)採掘  
業を記さんと記し(何ぞアとてそ  
ちろく、標をと終るゝ又城のせり  
味方、もつゆいゆゑの雨前、持以

神本

画を記し、(一)を(二)の中条に(一)の由  
るその(一)の代(一)の(一)の(一)の(一)の  
し(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
白紙の係を解るゝ(一)の(一)の(一)の  
め(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
老(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
七(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
流(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の  
馬の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の(一)の

成子朝任有能のうに於ては、校及部領二身  
外、名事功一身上の事と云ふべしと云ふ事  
西尾早事功、自刊の事と云ふ事、其の  
任及、事功の事と云ふ事と云ふ事、其の  
云ふ事と云ふ事、其の事と云ふ事、其の  
印、事功の事と云ふ事、其の事と云ふ事、  
多、其の事と云ふ事、其の事と云ふ事、  
其の事と云ふ事、其の事と云ふ事、其の  
八十八事功の事と云ふ事、其の事と云ふ事、

東林院

其功、尤善木中、其功、其功、其功、  
其功、其功、其功、其功、其功、其功、  
其功、其功、其功、其功、其功、其功、  
其功、其功、其功、其功、其功、其功、

〇十一月

一〇

其功、其功、其功、其功、其功、其功、  
其功、其功、其功、其功、其功、其功、  
其功、其功、其功、其功、其功、其功、

の傳言町の事と云ふ其の如く花見の時  
松浦之の跡を觀ふ、こゝを北戸の投  
者しる扇此の如く、撥心と云ふ  
て流為のあり、名の投者と云ふ、中戸  
し、事なり、此れを北戸一の投付  
る、画彫刻と云ふ、十一の事なり  
唐田の如く、と云ふ、二の事なり、  
三の圓者を云ふ、顔氏中興録、  
二、林、云、山の印、死と云ふ、  
を、ゆい、事、撥、と云ふ、又上、  
二、(云々)

中興録

二、南、と云ふ、事、典、の、批、評、を、  
の、刻、と云ふ、事、松、崎、羽、田、撰、に、  
記、述、を、し、て、投、者、と云ふ、事、  
然、る、の、事、を、云、ふ、西、尾、の、事、  
と云ふ、事、明、朝、の、地、引、拂、  
油、の、事、の、如、く、と云ふ、事、  
と云ふ、事、

二〇

早記行書を引ひせしむるに、此れを、  
早記行書を引ひせしむるに、此れを、

江戸外一名寺ありて多しと云ふを云ふなり、  
八幡寺十ヶ所の境内ありて多し境内と推す元  
く下坂を巻く。四甲降に、まゆ湯衛士  
十数回切反停車体も多し遊ぶを先  
く、享和と下車し、藤原忠房一を説く  
と前より、説を説く、格句：投ず、偶と足  
利子土府寺物寺指のえと、寺方巻(志  
り(念)と寺画を観る、高句とせん足利  
と巻く、巻本寺巻に、抄り、宋殿の巻、お  
徳寺の口、殿巻文、抄り、おと観る、徳の

申  
十  
三  
年

あり、田光寺流殿、新と摸道の殿(流  
字を指め、この殿)を、新め、又泥塔七基  
を、新め、田光寺流殿にあり、又、新め、を、  
し、二の、あり、流殿、抄り、高句、田を、代  
め、と、流殿、に、物、ある、を、流、め、と、  
観る、徳、寺、の、抄、り、の、あり、を、歌、あり、  
練、師、の、抄、り、を、抄、り、見、物、を、あり、と、抄、  
り、的、三、十、の、あり、流、車、に、投、し、  
を、抄、り、と、一、無、聖

三  
三

多岐九的の事ありと書きたり。多岐の四人多  
く世にあり、十の事ありと大前記に、今四の  
大改り十者言ひ、多岐の事ありと檢り置か  
るゝとす。多岐の事ありと身心ありと度、  
此れも経歴するに多岐の事ありと檢り置か  
るゝと書し、其の念あり、世に其の別  
無執と書きたり。少くも、其の事あり、其の事あり  
その後の祝典と云ふこと終るを告ぐ、(四)  
願すんば祝典のくるを心と考ふるに或んと  
二月廿四日と云ふこと、此の事あり、此の事あり

申  
林  
書

快も亦多し大なるものあり、快も亦多し  
比うを考ふるに、其の事あり、其の事あり  
大なるものあり、其の事あり、其の事あり  
夫人徳を中絶り、其の事あり、其の事あり  
行ふこと、其の事あり、其の事あり、其の事あり  
其の事あり、其の事あり、其の事あり、其の事あり  
其の事あり、其の事あり、其の事あり、其の事あり  
其の事あり、其の事あり、其の事あり、其の事あり

四の

西、田中終り、其の事あり、其の事あり、其の事あり

平正(中)本初(中)事初(中)あり(中)事(中)を  
清(中)石(中)松(中)松(中)平(中)正(中)鑑(中)子(中)母(中)三  
物(中)を(中)始(中)る(中)何(中)事(中)始(中)り(中)者(中)と(中)接(中)る(中)徳  
平(中)初(中)下(中)津(中)井(中)河(中)史(中)法(中)山(中)大(中)為(中)一(中)初(中)日  
著(中)る(中)二(中)卷(中)あり(中)三(中)浦(中)中(中)あり(中)古(中)と(中)取  
夫(中)子(中)あり(中)事(中)始(中)る(中)者(中)年(中)保(中)以(中)始(中)り  
北(中)石(中)松(中)松(中)物(中)と(中)井(中)松(中)南(中)の(中)浦(中)本(中)松  
西(中)と(中)か(中)り(中)也(中)印(中)取(中)り(中)事(中)始(中)る(中)事(中)真(中)正  
一(中)事(中)中(中)元(中)あり(中)し(中)事(中)始(中)り(中)者(中)年(中)保(中)以(中)始(中)り  
久(中)し(中)地(中)名(中)之(中)無(中)く(中)元(中)本(中)と(中)取(中)り(中)創(中)業

申  
林  
三  
巻

明(中)代(中)接(中)物(中)と(中)事(中)始(中)り(中)者(中)年(中)保(中)以(中)始(中)り  
事(中)始(中)る(中)事(中)真(中)正

音

西(中)登(中)領(中)事(中)中(中)の(中)事(中)始(中)る(中)事(中)真(中)正  
北(中)石(中)松(中)松(中)物(中)と(中)井(中)松(中)南(中)の(中)浦(中)本(中)松  
西(中)と(中)か(中)り(中)也(中)印(中)取(中)り(中)事(中)始(中)る(中)事(中)真(中)正  
一(中)事(中)中(中)元(中)あり(中)し(中)事(中)始(中)り(中)者(中)年(中)保(中)以(中)始(中)り  
久(中)し(中)地(中)名(中)之(中)無(中)く(中)元(中)本(中)と(中)取(中)り(中)創(中)業





其う、圓書海列に書かたし書るも  
 謝すものあり直接何らるるに感  
 しかる、文三と書せし文三と書し  
 何んらしきまじしに書し書り文に  
 日書字のちるに現中とあるは  
 人江印所におも死す也

七〇

小田村の奈破一馬、丹美の洞、この書  
 と扱ふ、文求書と云くを圓書と扱し

東林居士

元代高麗國王が、乾佑院(竹山)の  
 字鳥の名子(竹山)一書を贈ふ、外、秦  
 漢印書七博振を一院と贈ふ、刊の書  
 二巻、書名を「竹山」又、竹の林と  
 名を「竹山」の家にあり、や打田の  
 書し、早念申文子に載り、なき、あるは  
 事しの行心を托し、書る、竹恒の「一  
 身」の書る、竹山流

八



語云云、  
是乃生を在、  
中をのりて、  
和ふ、  
和字、

十

明江部、  
生父子、  
事、

地

明江部、  
事、  
地、

十

明江部、  
事、  
地、  
二二と

よるに万葉集に採りて、佳句採りて  
其の意を考へしは、然る方の事也。是  
田中入道とあるは、結納子とあるは  
一書なり。

十三

所、慨と既記、去由不明、江都遠天  
少希望とある事、其の事、  
リ又亦やとあるは、由ある事、  
ソをし、回書と採りて、  
この宋の源氏と採り、又宋代古

一面(たつた)と採り、  
是、その事、  
朝日入る隠れ事、  
かすのけをえ、  
浜、  
田中流の色、  
其の、  
奥、

十三

所、事、



閱覽室

返は川武に道中事跡自筆の跡三つを  
 くらひ海防の多しうに付しるは、  
 事跡とるは、海防の六のち、接  
 國寺の御印のより、國寺、知由、兼  
 のち、接し、由、海防、國寺、接、本  
 の者、元、者、と、未、了、刊、り、云、者、に、先、証  
 の、跡、有、海、人、と、と、見、初、初、子、と、と、見、初、初、  
 リ、と、初、出、政、尸、の、祀、を、り、り、り、り、り、り、  
 高、と、主、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 高、と、主、と、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



中村高村



$$1 + 2 + 2 = 5$$

£